

元暁の和諍原理

——華嚴一心について——

全 海 住

1

元暁 (617-686) が生まれ修学し、教化を繰り広げた時期は、新羅が三国を統一した統一新羅前後の時期である。長い戦乱で民心が疲弊し、葛藤が深刻化していた当時、元暁が苦悩しながら新羅社会に及ぼした影響とは、まさしく葛藤の和解と苦痛の消滅であった。彼が「和諍国師」と呼ばれるのにいたったことでも、そのことを窺うことができる。そのような彼の思想と徳化は、今日に至ってもその光を失っていない。

しかし、葛藤や対立の和解は、まさに華嚴思想の核心であり、元暁の悟りと和諍原理は明らかに華嚴と関係があると言える。それはまさしく「心」の理解に根拠を置いていることが分かる。元暁の華嚴関係の著述も、7部15巻あったことが伝えられており、そのうち『華嚴経疏』が一部現存している。

本稿では、「和諍国師」として知られる元暁の和諍思想の根拠となる「一心」が、如来蔵一心から一歩進んで、華嚴一心にまで発展していることを、元暁の無碍行や教判説などに関連させながら明らかにしてみたい。

2

元暁は多くの著述を残したが、そのうち22部が現存している。そのうち元暁の和諍思想が理解できるものとして、まず『十門和諍論』をあげることができる。タイトルから分かるように、和諍の内容は十門に分類される。しかし『十門和諍論』は全文が伝わらず、その十門については前後の内容を通じて推定せざるを得ない。元暁は、三乗と一乗、空と有、人と法、真と俗などの異執と異諍を和解させ、会通させているのである。この「十門」の十という数字は、華嚴での円満数で「無尽」の意味である。

だが、元暁の和諍精神は、この『十門和諍論』だけでなく、元暁の著述の至る

ところに表れている。特に各経論の大義を明らかにする部分において、元暁の和諍思想に接することができる。

例えば『涅槃宗要』では、『涅槃経』が百家の異諍、つまり、あらゆる異説の論争を和解させるとしている。『大乘起信論別記』では『大乘起信論』が「立」と「破」が自在で、諸論の祖宗であり、群諍の評諍の評主となるとしている。『金剛三昧経論』で明らかにしている元暁の実践・修行観もまた、和諍の論理として展開されている。こうして元暁は、性相を融攝して明らかにし、古今を包括して百家異諍の端を和解したと推仰されたのである。

3

ならば、そのような和諍が成立する根拠とはいかなるものか。それはまさしく「一心」であることが分かる。「一心」もまた元暁の著述の大部分を占める主内容である。元暁が関心を見せている「唯識」「如来蔵」「涅槃」「華嚴」などは、唯心説がその主流をなしている。これは元暁の悟りの内容とも関連がある。元暁の著述にみられる思想や実践行は、彼の悟りの力によるものであろうことは推定するのに難しくない。『宋高僧伝』に言及されている彼の悟りの契機と内容は、広く知られている。元暁は唐の玄奘(602-664)の唯識思想の体得を志し、遊学の道へと旅立ち、心生法生の理致を悟り、遊学の志を放棄したということである。だが、元暁が詠じた「心生故種種法生、心滅胡龜墳不二」という内容は、『起信論』に見られる一心説によるものであることが分かる。『起信論』では、如来蔵である衆生心の中で生滅心を説明する部分で、「心生則種種法生、心滅則種種法滅」としている。このような悟りの逸話は、元暁の一心観が、唯識から如来蔵へと変わったことを示すものと言えよう。

元暁は『起信論疏』において、この「心生」ないしは「法滅」の句節を、「無明力ゆえに不覚心動であり、ないしは能現一切境等であるゆえに、心生則種種法生であるとしたのであり、もし無明心が滅すれば境界も滅し、あらゆる分別識がみな滅尽するのだから、心滅則種種法滅としたのである」と説明している。これと関連する『起信論』説を見ると、心である「阿梨耶識」が生滅の因であり、「阿梨耶識」にある無明が生滅の縁となって「意」があり、「意」に「業識」「転識」「現識」「智識」「相統識」の五意がある。このうち「業識」「転識」「現識」が生滅することが「阿梨耶識」と「阿梨耶識」にある無明によるものであるゆえ、「阿梨耶識」である心が生ずれば、種々の法が生じ、心が滅すれば種々の法が滅すると解

釈している。また『起信論』では「阿梨耶識」を「不生不滅が生滅とともに和合して、一つのものでなく異なるものでもないことを阿梨耶識という」と定義し、この阿梨耶識に「業識」「転識」「現識」を属させている。よって元暁が悟り詠じた心は、不生不滅が生滅と和合した心であって、これは如来蔵心と異なるものではない。『別記』でも生滅心について、所依の如来蔵と能依の生滅心をとともに取り、合わせて心生滅門となったのだから、心生滅というものは如来蔵によるものであるから生滅心があり、如来蔵を捨てて生滅心を取り、生滅門としたのではないと言う。

このように元暁の如来蔵思想は、唯識思想を包摂しているが、これは『二障義』において隠密門に顕了門を内属させている点においても見られる。元暁は如来蔵を唯識の優位においていることが分かるのである。

このような元暁の一心観は、彼の実践行を引き起こす原動力と考えられるが、その実践内容を示す代表的な著述は、これまで晩年の『金剛三昧経論』であると考えられてきた。しかし、その『金剛三昧経論』でもやはり、和諍の方便が一心によっていることを説いている。一心は有無を越えており、だから真俗が2つのものではなく、「一」・「二」・「染」・「浄」もまた異なるものではないとする。真俗円融の和諍は一心にもとづいているのである。このような『金剛三昧経論』の一心説もまた、『大乘起信論疏』『別記』の如来蔵一心と無関係ではない。元暁は『起信論』の如来蔵説もまた、唯識と中観を和解させる「立破無碍、開合自在」の原理であると言い、起信論の争論の評主としたのである。だが、これは『起信論』にいう真如と生滅が、ともに一心の二門であるためであることに注目し、対立的に見える真如門と生滅門を和解させたのである。つまり、真如門と生滅門が対立するとしても、人間の心を対象とする点では異なるところがない。一心によって二門があるゆえ、二門が和合した一心は、窮極的な本源において、2つの門の相互作用（立・破）を通じて、「体」・「相」・「用」の三大を生じさせると見たのである。だから元暁は、中観が「破」のみであり、唯識は「立」だけであるが、『起信論』の如来蔵はこの両者が自在であると評しているのである。よって、これまで、元暁の和諍を支えているものは『起信論』であり、和諍の原理である一心が『起信論』の如来蔵心であると主張されてきたのである。

しかし、元暁の一心観はこの如来蔵心にとどまらず、また華嚴の唯心説にまで発展することになることが分かる。元暁は『別記』において、『起信論』が一心から二門を開き、諸經典の要諦に一貫しているといい、『華嚴経』もこれに含めてい

る。

唯識の一心が妄心であり、如来蔵心が真妄和合心であるならば、華嚴一心は真心で、如来性起心である。元暁の一心が、真妄和合の如来蔵心から、如来性起の華嚴一心へと転換したと言えるだろうが、これは元暁の華嚴との関係を通じて考えることができる。元暁は芬皇寺にとどまりながら『華嚴経疏』を撰述し、第四の「十廻向品」にいたって絶筆した。そして、華嚴的实践のために衆生の中に入り込んだ。その時、元暁が叫んだ「一切無碍人、一道出生死」は、もちろん『華嚴経』に教説されている「偈頌」である。元暁は無碍の瓢を叩き、無碍歌を歌い無碍舞を舞って、千村万落を回り、教化行を繰り広げた。衆生界に入り込み、一乗華嚴の無碍精神を身を挺して実践した元暁の実践行は華嚴菩薩行であり、これはまさしく如来の出現それ自体であると言える、如来の出現は如来性起であるので、元暁の一心は華嚴の如来性起心であると考えられよう。

4

元暁の『起信論』思想は、中国の華嚴家らが教判している三乗終教にとどまるものではなく、華嚴の普法段階にまで上がっているが、これを通じても、元暁の一心は、如来蔵心においてさらに一歩進み、華嚴の一心であることが分かる。元暁は自らの四種教判説において、華嚴が「普法」であるゆえに一乗満教であると教判し、もっとも殊勝な教説であると強調している。「普法」とは、一切の法が相入・相是することを意味する。一切の法が大小のもの、一と多などの範疇から、互いに入り込み、包摂し、相互に同一の、広大な華嚴経の世界を「普法」と呼んだのである。

ならば、一切の法がそのように相入・相是し、無碍できる理由とはいかなるものであろうか。元暁はこれについて、十の因を挙げている。普法の十因の中には、先に和諍の根拠として提示された一心の内容そのままのものも見られる。あらゆるものは唯識であり、一心と法体は一つのもので異なるものでもないため無碍であるというのである。だが、至大至小の量が同じであるとする第六因の内容は、元暁が特に強調した点であると推定できる。元暁は『起信論疏』においても「大乘、つまり衆生心の体は大きいと言おうとすると、無内に入っても余りがなく、小さいと言おうとすると無外を包括して余りある」とし、『起信論』の一心も、このような至大至小、同一量の華嚴世界として描写しているのである。

5

これまで、元暁の和浄原理は華嚴の一心世界であることをみたが、そのような元暁の華嚴思想は、何よりも彼の華嚴関係の著述に見られるものがその精髓であると言えよう。だが、元暁の華嚴関係の著述で現存するものは『華嚴経疏』の「序文」と「光明覚品疏」のみである。元暁が「序文」において明らかにした『華嚴経』の核心思想は、普法説で説明した内容と大きく異なるところはない。「序文」では普法説の大小・一多に、「促奢」「動静」の相入・相是をさらに定め、華嚴世界を明らかにしている。元暁は華嚴世界を無障無碍の法界と把握し、生死と涅槃に自在な境界を見ているのである。一然が『三国遺事』において「元暁不羈」と称したのは、まさにこのような元暁の無碍境界を反映したものと考えられるだろう。「光明覚品疏」にも有無・増減などの相対性を超越した、相入・無障碍の元暁の華嚴思想が表れている。

元暁の華嚴経観は、『華嚴経』の名称を解釈した部分にもよく表れている。元暁は『華嚴経』の原名称である『大方広仏華嚴経』について、法界が無限であることが大方広であり、行徳が無邊であることが仏華嚴であると考え、大方広を証得する法とみなし、仏華嚴を証得する主体とみなしたのである。大方でなければ仏華を広く平等にできず、仏華でなければ大方を壯嚴に行なうことができないとし、大方と仏華を対のものとして捉えて、広と嚴の宗を表現しているのである。このような元暁の広嚴思想は、彼が衆生を教化した多様な菩薩行として表れていることが分かる。

元暁が華嚴と因縁が深かったことは、説話を通じてよく分かる。擲板救衆説話や華嚴ボル説話は、元暁の華嚴家としての面貌をよく伝えている。『三国遺事』では元暁の位階を「初地菩薩」とし、「仏影寺記」には元暁を、現在、華嚴地にとどまる菩薩であるとしている。このように元暁に関して現在に伝わる説話も、元暁が『華嚴経』を講義した華嚴菩薩であることを示している。

このように、統一新羅前後の当時の深刻な葛藤を和解させ、民衆の苦痛を解決した元暁の華嚴一心思想は、今日、私たちが直面している数多くの葛藤や矛盾を解決する方途を模索するにあたって、示唆するところが実に大きいと言えよう。

〈キーワード〉 元暁、和浄原理、華嚴一心

（東国大副教授、哲博）